

---

# 俺は魔術が使えない 私は魔術を使わない 不可能と拒否の言霊

小都吹 片瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺は魔術が使えない 私は魔術を使わない 不可能と拒否の言霊

### 【Nコード】

N5240V

### 【作者名】

小都吹 片瀬

### 【あらすじ】

魔術を使う「天使」と呼ばれる人間がいる世界。

「天使」になりたかった少年、五十嵐誓。

「天使」になりたくなかった少女、神崎月野。

家族を護るため戦う少年、神崎星野。

過去の出来事で天使を統べる「聖天使」となった誓の幼馴染、五月  
雨樹理華。

犯罪者とされた元聖天使の娘、来須水脈。

たくさんの人と関わってセカイの真実を知っていく5人。

「悪魔」とはなんなのか…

失踪した「死神」は何を知っているのか…

普通の高校生になるはずだった彼らの敵は誰なのか…

これは私たちのセカイと少しずれたセカイに暮らす少年少女の狂っ  
た御伽噺。

あなたは、能力が欲しいですか？

## プロローグ

この世界には天使がいる。

天使なんて言っても頭上に輪が浮かんでいるわけではない。

もちろん、神の使いでもない。

ただ、人間には使えない力 魔術が使えるだけで「天使」と称える。

この世界には天使が溢れている。

母親のおなかの中にいるときに、両親が望めばその子供は「天使」になることができる。

科学の発展から得た賜物だろう。

「天使」と言っても、科学の力で魔術が使えるようになった「人間」だ。

「人間」には限度があったのだろう。

生まれてくる天使と呼ばれる人間は、魔術を一種類しか使えない。

炎、水、風、雷

のいずれかを操る魔術。

それを使えるだけで「天使」となる。

ちなみに、髪の色で能力が分かる仕組みになっている。

赤髪なら炎、青髪なら水、緑髪なら風、黄髪なら雷。

また、色が薄ければ薄いほど強い能力を持っている。

これは、そんな世界で生きる「天使」と「人間」の話

## Darkness 漆黒の出会い

いがらしちかい  
五十嵐誓、それが俺の名前。

だが、他人は決まって俺をこう呼ぶ。

「人間」

と。

俺の家は代々続く名家だ。

そんな家の人間が新しいことを取り入れようとはせず、俺は「天使」にはならなかった。なれなかった。

家の古い考えのせいで、俺も俺の親も「人間」と呼ばれ周囲になじめずにいた。

道を歩けば、俺の真っ黒の髪を目にした天使共が

「人間だ。」

「人間がいる。」

と指をさしておもしろがる。

元は同じ人間だろうに…

真っ黒な髪に生まれて16年、俺は今日から高校生になる。

「入学おめでとうございます。」

教師の話が終わると教室に案内された。

教室の扉をあけると、注目の的になった。

よほど「人間」が珍しいのだろう…

だが、教室を見渡して普通ならあり得ない色を見つけた…

「人間・・・？」

教室に黒い髪の間が二人いた。

しかも、ものすごい美少女と美少年。

見とれていると、美少年の方に話しかけられた。

「はじめまして、俺は神崎星野かんさきほしの。よろしく。」

「俺は五十嵐誓。仲間がいるとは思わなかった、超嬉しい。」

俺がそういうと、二人は一瞬顔をこわばらせたがすぐに笑顔に戻った。

「私は、神崎月野かんさきつきの。よろしくね。」

「神崎？」

「あ、うん。私たち兄妹なの。」

「なるほど。」

俺たちは担任が来るまで3人でずっと喋っていた。

2人とも、とてもいい奴ですぐ仲良くなれた。

「じゃあ、また明日な。」

「うん、また明日。」

俺は、初日から「人間」の友達ができてこれからの高校生活が楽しみになった。

「ねえ、星野？」

「なに月野。」

「誓、いい人だったね……」

「ああ……」



「私たちはあんなにいい人を騙してるんだね…」

「そうだな…」

綺麗に色がついてない髪に返り血をつけながら、美しい兄妹は家路につくのだった。

## Green Wind 透き通る緑髪

入学してから2週間、俺と神崎兄妹は常に一緒にいるようになった。クラスのやつらもグループを作っていて、俺たちを見ながら陰口を言ったりしているようだった。

俺は小さいころから言われてきたので悪口を言われるのが当たり前だと思っていたが、星野ほしのと月野つきのにとってはそうではなかったらしく、二人は傷ついていた。

特に月野は、かなり陰険な嫌がらせを女子から受けていたらしく教室にすることを拒み、休み時間の度に3人で屋上まで行った。

「あ、やべっ。ハチマキ忘れたあ。」

男女別の体育で俺は星野と移動をしていたのだが、途中でハチマキを教室に忘れたのを思い出した。

「ちょっと取ってくるわ。」

「俺も付いていこうか？」

「いや、先行つといて。遅刻しかけたら先生に言い訳しといてー。」

「了解、いそげよ。」

「ああ。」

俺は星野と別れ来た道を走る。

やっと教室についた。

扉を開けようと手をかけると、教室に人がいるようで話し声が聞こえた。

「……………だよ。」

少し怒っているような声が聞こえた。

どうやら女子が数人残っているようだ。

入るタイミングをはかっていると、机やイスが倒れる大きな音が教室から響いてきた。

「なんだ…?」

扉の隙間から教室をのぞくと、赤髪の女子が怒り狂ったように詠唱えいしやうを始めた。

「我、欲するは全てを焼き尽くす炎、模かたじるは球…」

その「天使」の睨む先にいたのは月野だった。

おそらく月野に嫌がらせをしている連中だろう。

赤髪ってことは炎だよな…

やばい！やばいって！

何とかしなくちゃ…

そう、何とかしなくちゃならない。

だが…

「俺は魔術が使えない…」

友人の一人も守れないなんて、やっぱり俺は無能な「人間」なんだ。

「私の怒りを買った者に戒めを…」

そんなことを考えている時間は無い！

何とかしなくちゃ！

「五十嵐くん？何をしているの？」

急に後ろから声がした。

振り返るとそこには…

「樹理華…？」  
じゅりか

透き通るような髪の色、透明勝りな緑色。

「久しぶりね、って言っている場合じゃないわね。」

樹理華は教室の様子に気づいたみたいで、扉をガラツと開け入って行った。

「炎よ舞え!!!!!!」

「風よ炎を消し去れ!!!」

一瞬炎が出たかと思うと、次の瞬間には突風で目を開けられなくなっていた。

「すげー……」

少しの間呆然と立っていたがハッと我にかえり、月野のところまで走っていく。

「月野!大丈夫か??」

「誓!どうしたの?」

月野は冷静にそう言った。

炎を目の前にしてこの反応はどうなのだろうか。

「どうしたの?じゃねえよ。平気か?怪我とかしてないか?」

「うん、平気だけど。」

「なんなの!!!??なんなんだよ!!!??」

炎をだした赤髪の「天使」と周りにいた女子は何が起こったのかわ

からない様子だった。

「あなたたち何してたの？まさか能力をつかって嫌がらせしてたなんてないわよね？」

「樹理華様！！」

彼女たちは樹理華の存在に気づいていなかったようだ。

「今すぐにこの場から立ち去りなさい！それから二度と彼女に関わらないと約束しなさい。」

「はい！失礼しました。」

彼女たちは逃げるように教室から去って行った。

「大丈夫？」

樹理華は月野に声をかけた。

「えっと…確か神崎月野さんよね。」

「え、うん？」

「あなた有名だから。」

心底不思議そうな顔をした月野に樹理華は答えた。

「それは嫌味なの？」

月野は不機嫌そうな顔になった。

「なんで？」

「私は人間だから目立つって言いたいんでしょ？」

「そうね、でも目立つ理由もあなたが嫌がらせされるのも人間だからってだけじゃないでしょ？」

「は？」

「同じ女からみればあなたの容姿が気に入らないんでしょ？」

「…？」

月野は？を浮かべていた。

「樹理華が言うには、月野が可愛いから女子に嫉妬されてるらしい。」

「じゃあ、あなたも私の容姿が嫌なの？」

「？あたしは自分の容姿に不満はないからそうは思わないけど…。」

「お前は変わらないな…。」

「そう？」

「ああ。」

ああ、変わっていない。昔から。

「樹理華さんは誓とどんな関係なの？」

月野が少し不機嫌そうに尋ねた。

「どんな関係だと思っ？」

いたずらっぽく樹理華が尋ね返した。

「…恋人とか？」

「っはは、ははは。あたしとちーくんが恋人？あははおかしい。」

樹理華は笑い転げた。

「…幼馴染ってやつだよ。」

いまだに笑っている樹理華の代わりに俺が答えた。

「幼馴染か、そっか…」

「あーおかしい、あっそうだ。あたし授業始まって来ない生徒を呼んで来いって言われてたんだ。ホラ、立って！」

樹理華は月野の手をひくと、

「行こう、月野。」

と笑顔で言った。



「うん。」

樹理かと月野は手をつなぎながら走って行った。

…あ。

俺、遅刻だ…。

…まあいいか。

そのあと俺は教師にコツテリ絞られ、星野に事情を話しながら授業を受けた。

体育館から校庭を見ると黒い髪と透き通った緑の髪が並んで走っているのが見えた。

まあ、月野に女友達ができたってことでいいか…。

「今日は一段と数が多いね…。」

「まあ、雑魚ばかりだけどな。」

「30秒で終わらせるわ。」

昼間黒い髪は、色が落ちて白 いや白より透き通った「透明」の髪

となっている。

倒した「敵」の血を浴びて今日もどころどころ赤黒くなっている。

そう、兄妹は「人間」ではない

## Digitizing 能力判定テスト

能力判定テスト

高校生になつた国民全員に課せられる義務。

このテストでの判定が就職やら進学やらにかかわってくる。

1〜10で判断される能力値。

大抵の生徒は1〜5。強い生徒は6〜8。

9、10なんてのは滅多にいない。

ちなみに俺の中学の模試での判定は2。

魔術、学力、体力のうち学力と体力だけで2をとつたのだから自分でもすごいと思う。

「人間」も魔術テストを受けなければならぬのだが、俺は受けなかつた。

「天使」と混ぜつて魔術テストなんて死ぬだろ…

命を賭けてまで俺はランクが欲しいわけではないし、テストを受けることでランクが左右されるとは思えない。

俺は人間だから…

「判定テストだね…」

昼食中、月野がため息混じりで言った。

いつも通り俺たちは屋上で弁当を食べている。

いつもと違うのは、

「判定テストおもしろいじゃない。」

透き通る長い緑髪、かわいらしい感じの月野とは違った綺麗な顔。

俺の幼馴染、五月雨樹理華。さみだれじゅりか

あの一件から樹理華は俺たちと昼食をとるようになっていた。

「おもしろいって…ただ面倒なだけじゃない。」

「そうだ、知ってる？」

星野ほしのが急に口をはさんだ。

「今年から、各自グループを作って魔術試験をするらしいよ。」

「グループ？」

「うん、でさ提案なんだけど4人で組まないか？」

真っ先に樹理華が言った。

「あたしは賛成ね。」

「私も。」

月野も樹理華が言った後にすぐ賛成意見。

「誓は？」

「俺は…俺は正直反対だな…。」

そう、俺はこの意見には賛成できない。

「なんで？嫌なの？」

月野が俺の顔を覗き込む。

どうやら俺は知らないうちに顔を伏せていたらしい。

「嫌って言うか…。樹理華、お前の能力にはもっと見合ったやつがいるだろ。」

「…まで。」

「ん？」

「…いつまで、いつまで引きずってんのよ……！！！！！！」

「樹理華……？」

月野が樹理華を心配そうな目で見ていた。

だが、俺にはそれどころじゃなかった。

「いつまで？いつまでも引きずるさ！あんなことがあったんだぞ。」

「もう……もう終わったことじゃない！」

言いかう俺たちを見かねたのか星野が仲裁に入った。

「ふたりともやめろ。グループの事を提案したのは俺だ。意見があるなら俺にも……俺たちにもわかるように説明してくれ。」

それは、今から5年前。

俺が小学校5年生のころの話

Cover in the past 「ちーくん」と「じゅり」

5年前

「なあ、じゅり。」

「なあにちーくん。」

「もうすぐやるってセンサーがゆってた“能力判定模試”ってなんだ？」

「高校生になったら皆がやらなくちゃいけないテストの練習って言うってたじゃない。あたしたちはもう高学年なんだから、そういうテストを受けなきゃいけないの！これからは毎年あるみたいよ。」

「そうなんだ…。俺、魔術使えないからやりたくないな。」

「大丈夫よ！ペアでやるって言うてたから、あたしと組めばいいのよ。」

「いいの？嬉しい。」

「あたしもちーくんと組めて嬉しいよ。」

“ちーくんとじゅり”は幼馴染であり、親友だった。

小学生の男女が仲いいと周りがひやかすものだが、二人は誰が見ても恋愛ではなく友情の関係だった。

また、「じゅり」はかなり高い能力をもった天使であり、その友人の「ちーくん」は人間であるのにクラスになじんでいた。

人間の「ちーくん」に反感を持っていても「じゅり」が怖くて「ちーくん」と仲良くしていた、なんてのは最初だけで、みんな「ちーくん」が大好きになった。

「ちーくん」はみんなから好かれる性格だったからだ。

一方で思ったことをすぐに口に出してしまい、性格を誤解されやすい「じゅり」は友人関係で「ちーくん」に何度も助けられていた。

“じゅりとちーくん”はお互いに無いものを持っている存在で、それをお互いに認めている親友だった。

『今回の試験の内容は、この山全体にある“キーワードが書かれた紙”を50個見つけて、答えを見つけたらこの場所に戻ってきてください。制限時間は12時間です。』

なお、山にはトラップが仕掛けられているので魔術を使って回避して下さい。

危険を感じたら各ペアに配っているコールボタンを押してください。緑天使の先生が一瞬で駆けつけます。

色々ところに魔力探査の機械が設置しており、それで魔力を検査します。



それでは、安全に気をつけながら頑張ってください。

では、試験開始！」

「ちーくん、つかまって。」

「りょーかい。」

二人はじゅりの魔術を使って山を移動し、キーワードを集めるとい  
う作戦をたてていた。

「我、欲するは宙を歩く力……」

じゅりの詠唱が始まるとすぐに二人の体は宙に浮いた。

「風よ、舞え！……ふう、これで歩けるわ。」

「じゅりでも詠唱はいるんだね。」

「あたりまえじゃない。詠唱をしなくても魔術を使える天使なんて  
ランク6は超えてるわよ。」

「そうなんだ、でもじゅりならきつと、もうすぐできるようになる  
よー！」

「ありがとう。」

二人は次々にキーワードを見つけていった。

50個目、最後のキーワードを見つけたのも二人が一番だった。

「ふう、これで最後か。」

「結局答えって何だったの？」

「そうだな…えっと、『山のどこかに“神が創った”と言われる泉がある。その水を各ペアに支給したペットボトルに一杯に汲んで来い。』ってとこかな。」

「さすが学力は優等生ね。」

「まあね。」

「じゃあ、泉はあたしが魔術で探すわ。」

「よろしく。」

「ラッキーね。ここから近いみたい。急ぎましょう。」

「ああ。」

二人は10秒もしないうちに泉についた。

「綺麗ね…」

「ホントに神様が創ったみたいだ…」





「わかった！」

じゅりはカバンからボタンをとりだし、押した。

…だが、通常鳴るはずのコール音が鳴らない。

「な、なんで！なんで鳴らないの！」

「じゅ…り…」

「ちーくん」の意識がもうろうつと始めていた。

「いや！いや！ちーくん！…ちーくん！…！…！…！…！…！」

「いや――――――――――」

――――――――――」

周囲の木はすべて切り倒され、泉の水はふきとばされた。

「じゅり」がだした風は今存在している緑天使の誰よりも強い、それほど強力な魔術だった。

黒いものは消えかかり、「ちーくん」は解放され、「じゅり」は何が起こったのか理解できないでいた。

「テンシ、スバラシイノウリヨク。」

「ダガ、ソレハニセモノ。オマエタチハダマサレテイル。ワタシハ――――」

欠片はそれだけ言い残し消えた。

最後に残ったのは首を絞められたときにできた「じゅりの痣」とじゅりを守れなかった「ちーくん」の後悔だった。

その出来事から「じゅり」の能力はかなり評価されて国が定める、天使を統べる四人 聖天使にえらばれ、周囲から「樹理華様」と呼ばれるようになった。

「ちーくん」は、「樹理華様の足手まといになった無能な人間」として見られ、周囲から浮いて行った。

樹理華がどれだけ話しかけようとしても「人間なんかと話してはいけません。」と言われ、「無能な人間」は「樹理華様」に話しかけることは無かった。

中学は別で、「樹理華」と「五十嵐くん」が再会するのはこの事件から5年後。

あたしは体育の授業に来ない隣のクラスの生徒を呼びに教室まで行った。

そこで扉の隙間から教室を覗き込んでいる「ちーくん」を見つけた。

「話してはいけません。」と言つものは誰もいない。

だが、5年も話していない。

あたしのことなんて忘れているかもしれない。

覚えていても無視されるかもしれない。

だけど話したい。

勇気をだして…！

「五十嵐君、何をしているの？」

「樹理華…？」

Door of Dark 「誓」と「樹理華」

俺は「じゅり」を護れなかった。

「じゅり」はそんなに魔術が好きでは無いのに、俺のせいで「聖天使」にされてしまった。

俺がもし「天使」だったら…

そんなことを毎日考えていた。

「それってさ、気にするところそこなの？」

「え？」

「私がもしその場にいたとしたら、まず黒いのがなんなのか気になるんだけど。」

「それは俺も思った。」

双子に五年前の話をしたら、真っ先にこんな感想を言われた。

「確かに俺も気にしなかった訳じゃないけど、先生たちが仕掛けたトラップだって言ってたし。」

その瞬間双子が顔を見合わせような気がした。

不思議に思ったが星野ほしのがすぐに口を開いた。



「で、話をもどすけど、誓は樹理華さんと組むのは反対なわけ？」

「樹理華が俺：俺たち人間と組んだら正当な評価がもらえるのか？能力が高い奴と組んだ方が絶対に有利だと思っただが…。」

「あのお、誓。」

今度は月野ツキノが口を開いた。

「各自、グループをつくること、それが魔術試験の規則でしょ？各自なんだよ。」

樹理華に優秀な成績を与えたいのは主催者せんせいがわも同じ。だけど、あえて主催者からグループを作ってくることはなかった。だから結局、誰と組んでも正当な評価がもらえるんだよ。

それに、決めるのは樹理華だよ。誓が決めることじゃない。誓は樹理華と組みたいか組みたくないかだけ答えればいいんだよ。」

「…俺は樹理華と組みたい。俺はじゅりと組みたいよ！だけど、もし何かあっても俺じゃあ護れない。俺は魔術が使えないんだよ！」

「だそうだけど、樹理華はどう思ってるの？」

「あたしはちーくんチーくんに護ってもらわなくても大丈夫だよ！むしろあたしが護るよ！」

あたしは聖天使。ちーくんだけじゃなくて月野も星野くんも護れるよ！信じてよちーくん…」

あたしは評価より皆の方が大事だよ。何かあったときに3人で大丈夫なの？あたしなら…あたしなら魔術でみんな護れるもん！

…それに月野と星野くんだったら仲良くなれて、ちーくんとも喋れて、あたし、今すつごく楽しいんだよ。」

「私は樹理華と…樹理華と誓と星野とくみたい。」

「俺もだな。誓は？」

「俺も組みたい。」

「樹理華は？」

「あたしも組みたい。」

「じゃあ決定だね。よろしくね。」

「ああ。」

そうして、俺たちは4人でチームを作って魔術試験に臨んだ。

『今回の試験は皆さんが今までに受けていた模試とは異なり、本物の試験です。真剣に行ってください。』

試験は事前に各自作ってもらったグループで行ってもらいます。

各グループに一個、先代の青の聖天使様が創られた水晶、魔水晶を渡します。これを奪い合ってください。

自分のグループの水晶が奪われてもゲームは続行できますが、減点をさせていただきます。

活動範囲はこの山全域。

最終的に持っていた水晶の数と、色々な場所に仕掛けられた機械で魔術の評価をさせてもらいます。

制限時間は3日、必需品は配布したカバンに入っています。

模試でもやったと思いますが、危険を感じたらコールボタンを押してください。

では、試験開始！』

少し雰囲気が変わっていたから俺も樹理華も気付かなかったんだ。

この山は

5年前、模試が行われた山と同じ山だった。

## Colorless 双子の真実

「作戦は理解してる？」

俺たちの作戦は、まず人間の俺と月野つきので相手を油断させて樹理華が水晶を奪うというものだ。

星野ほしのは樹理華のそばで水晶を護っている。

「ああ、ばつちり。」

「じゃあ、行くよ。」

前方には、赤い髪の子と黄色の髪の男子4人のグループがいる。

まずは、ガサツと音をたててっ。

「誰だ？」

黄色が気付いたみたいだ。

えっと、次は詠唱が始まった瞬間に出てと。

「我……」

今だ！俺と月野は目配せしてグループの前に出る。

「うわっ！なんだよ人間かよ。」

よし、詠唱が止まった。

「人間なのに魔術テスト受けてるんだね。可愛いそうだから魔術は使わないでいたあげるよ。だから、早く水晶渡しなさい。」

赤天使が俺たちに近づいてくる。

俺たちの仕事は誰が水晶を持っているのか聞きだすまでだ。

「なあ。」

「なによ？」

「女子がそんなカバン持って歩くのって大変じゃね？」

「大変に決まってるじゃない、けどあたしが一番強いんだからしよつがないでしょ。いいから早く渡しなさいよ。」

俺は月野に目でサインを送った。

「樹理華ー!!」

月野がそう叫んで1秒もたたないうちに樹理華と星野が出てきた。

「樹理華様!!?」

樹理華はニコツと笑うと風を操り赤天使のカバンを奪った。

「ごめんだけど貰うね。」

そういい、カバンから水晶だけを抜き取り彼女に返した。

ようやく事態に気付いた相手は一斉に詠唱を始めた。

「我、欲するは…」

「遅いよ。」

樹理華のその言葉通り、俺たちは樹理華の魔術でもうすでに宙に浮かんで別の場所に移動し始めていた。

開始から1時間もたたない間に水晶を奪われたあのチームはさぞやる気をなくしただろう…

俺たちはそれから同じ手で数組から水晶を奪っていった。

休憩しようという事でたまたま見つけた平らなところで昼食にした。

「なんだかやけに涼しいわね、こじ。」

「ねえ、ちーくん…。」

「ああ、わかってる。」

わかってるさ、いくらなんでも忘れるわけがない。

こじは

「こじは、あの泉だ…。」



「ちーくん…アイツ!!!」

樹理華を捕まえていたのはアイツ 黒いものだった。

「誓、コール頼む。樹理華は教師の案内頼む!」

星野は嫌と言うほど落ち着いていた。

シスコンな星野の事だからもつとあせると思ったんだが…

「わかった!」

「あたしも!」

「オマエタチハアノトキノガキカ?」

ずっと黙っていた黒いものが話し始めた。

「早く!!!」

星野が俺たちを焦らす。

「ワタシハミナトチガイ、オマエタチヨリニンゲンノホウガニクイ。

」

黒いものは星野と月野を交互に見てそう言った。

そのあとは何が起こったのか一瞬わからなかった。



気がついたら俺と樹理華は黒いものに首を掴まれ持ち上げられていた。

「誓！樹理華！！」

樹理華に魔術を使ってもらおうとしたが樹理華の方を向くと気絶してしまっているようだった。

あれから、どんなに強くなってもトラウマになってしまっているのだろう。

「じゅり…か…！じゅ…りか！樹理華！！」

俺は必死に何度も樹理華を呼んだが、目を覚ます気配は全くない。

ああ、また俺は何もできないのか。

俺が「天使」じゃないから…

「天使」になりたかった。

皆を…親友を護れる力まじゅつが欲しかった。

「…ほし…の、つ…きの…とにげる！は…やく…！！」

コールボタンは俺が持っている。

だから教師がここに来ることはまずない。

とりあえず、二人は救わなくては！

高校になって初めてできた同族にんげんの友達を。

「星野、わたしもういいや。十分だよ。今まで付き合ってくれてありがとう。誓、樹理華。本当にごめんなさい。」

「俺も楽しかったよ。ありがとう。」

俺は月野と星野が何を言っているのかわからなかった。

次の瞬間まで。

二人の黒い髪は色が徐々に消えていき無くなった…。

色が無くなったというのはおかしいかと思うかもしれないが、本当に無くなった。

「し…る？」

「カラーレス（無色）。私たちは悪魔を討つ者。透明オリジナル天使。」

本当に俺には何を言っているのかわからなかった。

「あく…ま？カラーレス…？」

パンツ！

月野が手を叩くと両手から風と水が出てきた。

「私の友達を離して…!!」

水は風により形作られひも状になり俺と樹理華を黒いものから引き離した。

パンツ！

星野が手を叩くと両手から炎と雷が出てきて剣を模<sup>かたど</sup>った。

月野も全く同じものをだして剣を構えた。

「オマエタチヤハリホンモノ…」

「はあああつ！！」

二人は一斉に黒いものにきりかかった。

「ギャー…」

黒いものは断末魔の叫びをあげて消えた

「大丈夫？」

透明の髪をした美少女が俺に手を差し出す。

「お前は一体なんなんだ…？」

月野は困った顔をしながら言った。

「あたしたちは、透明天使。遺伝子を改造しないで生まれた本物の天使よ。」

「人間」だと思っていた…

お互いを理解できると思っていた…

「あはは、あはははは。お前たちも俺をバカにしたのか。魔術を使えない俺を。さぞ楽しかっただろうな！騙される俺を笑いながら見る気分は…！」

俺は月野の手をパシンと払って自分の手で身体を起こした。

月野はおそらくひどく傷ついた顔をしているだろう…

だが、俺は許せなかった。

俺が「天使」に憧れる姿をみて笑っていたのかと思うとはらわたが煮えくりかえる気分だった。

「私は…私は天使になんてなりたくなかった！」

そういうと月野は飛んでいってしまった。自らの背中から生えた翼で…

「誓。」

「なんだよ星野。」

「誓は天使になりたかったって言うけど…人間の方がいいって思うやつだって、中にはいるんだぜ。」

星野は樹理華を横抱きにしなから言った。

「俺たち透明天使の仕事は、あの黒い奴「悪魔」を討つことだ…。」

## Kill the devil 透明天使の使命

世界に「天使」は溢れている。

だが、それはしよせん人工<sup>にせもの</sup>。

人工<sup>にせもの</sup>が生まれるからには天然<sup>ほんもの</sup>がいたのだ。

生まれたときから人間離れしている力。

人はそれをこう呼んだ 超能力、と。

そんなある時、黒髪夫婦から髪の色が一切付いていない、透明髪の子が生まれた。

その子は自然の物を操る超能力を持っていた。

科学者たちはその子の遺伝子を調べ、結果胎児のときだったらその子の能力を少しだけ使えるようになることを発見した。

生まれてきたその子たちは、本物<sup>オリジナル</sup>と同じように髪の色が少し変わっていた。

髪の色で使える能力がわかれているらしい、本物<sup>オリジナル</sup>に近い色<sup>よつめい</sup>であればある程力が強いらしい、ということもその時の科学者が発見した。

本物<sup>オリジナル</sup>の少年は、重なって白くなった髪を揺らしながら国の、セカイの頂点に立った。

これが天使にせものが生まれたとされる話。

そのあと本物君がどうなったのかは誰も知らないらしい。

「下らない……」

俺と妹は、生まれたときから髪に色がなかった。

「人間」の母は、俺たちに自分の気持ちを理解してほしいという自己中な考えから、俺たちを「天使」にしようとは思わなかったらしい。

「天使」になるための遺伝子改造をされていないのに「天使」になった俺たちは、周りからもてはやされるのが日常だった。

俺と妹は模試でランク10オーバーという成績を出したりして、自分たちが皆にせものとちがう「天使ほんもの」だということに誇りを持っていた。

俺たちが中学に上がったとき、急に国から呼び出された。

国のお偉いさんからの話は俺たちに「悪魔」を討ってほしい、というものだった。

「悪魔」とはなんなのか、何故自分たちなのか、危険じゃないのか、そんなことを俺と妹は口々に言った。

「君たちの能力は、他の者よりけた外れに大きい。」

「君たちは強いから大丈夫だ。」

などとその人たちは言った。

俺と妹はそれを承諾しなかった。

すると

『君たちはお母さんが大事じゃないのかな？』

『お母さんは誰のおかげで生きているのかな？』

とお偉いさん方は嫌な風に笑って言った。

せこい、汚いと思ったが俺たちは承諾するしかなかった。

俺たちの母親は「天使」<sup>ほんもの</sup>を産んでしまったことから、検査を何回も受けさせられたり、細胞を取られたり、周りの人から「人間」の親から産まれるなんて…と陰口を叩かれたりして、精神的にやられていた。

父親は俺たちが産まれる前に失踪していて、俺たちの能力で貰える国からの補助金で生活していた。

国からの補助金はバカ高い。

ランク10オーバーが二人だから、1か月分の補助金で10年は生きていけるだろう額だ。

だが、実質その半分は母親の治療代に充てている。



だから、国からの援助がなくなると母親は間違いなく死んでしまうだろう。

それから、俺たちは「悪魔」とよばれる黒いモノを毎日倒して倒してた倒しまくった。

なんと命が危ないと思ったかはわからない。

だけど、俺たちのせいで狂った母さんを死なすわけにはいかなかった。

母さんは俺たちを愛してはいないかもしれない、だけど俺たちは母さんを愛しているから…

中学の3年間は正直苦痛だった。

「アイツらって影でやばい仕事してるらしいよ。」

「いくら力が強くて、なんかそういうの怖い…」

クラスのやつらは表面上は俺たちと仲良くしていたが、裏ではいろんなことを言っていた。

昼は学校で苦痛に耐えて、夜は「悪魔」と呼ばれる異様なものと戦って

そういう生活を送っているうちに妹は限界に達していた。

「ねえ、<sup>ほしの</sup>星野。あたし、もう生きていたくない…！」

返り血をつけ、身体を赤く染めながら妹は淡々と言った。

「なに言ってるんだよ！」

月野は口だけで笑ってからこう言った。

「私は天使になんて生まれたくなかった……」

俺は母さんを救う事ばかり考えて、妹の事を考えていなかったんだ……

俺の精神も限界に達しているのに、妹がもっと限界に近いんだと気付いてやれなかった。

「私は人間に生まれたかった……したらママも狂わなかった！人間に生まれていたら、人間の友達ができたかもしれない。きっとその辺にいる天使（にせもの）よりもな精神を持っているわ。どうして……！どうして私は天使なの……！！！」

俺は月野を抱きしめた。

「月野：ごめんな。ごめん。そうだ、俺たちは人間に生まれるはずだったんだ。人間に……人間になろう。」

中学を卒業した日、俺たちは髪を染めた。

魔術で染めているから、魔術を使うときは透明に戻ってしまう。

だけど、それで十分だ。

「人間」は魔術を使えないんだから。

「ねえ、星野。私は誰とも戦いたくない。私は昼は人間になる。」

「うん、俺も。」

「だけど、悪魔はちゃんと討つわ。ママのために。」

「ああ。」

「でも、それは天使の神崎月野の仕事。人間の神崎月野は…私は…」

「ああ。」

「私は魔術を使わない。」

髪を染めるのは犯罪だ

そんなことは知っている。

だが、俺たちは国の為に働いている。

だから、そのことについては国に黙認してもらっている。

そつでもしないと妹は壊れてしまう。

妹が壊れたら、俺には何が残る…？

俺と妹は黒い髪で入学式へ行つた。

天使たちは指をさして笑っている。  
にせもの

自分たちより価値のないものに何を言われても何とも思わない。

そんなとき、教室の扉が開いた

「人間…？」

扉に立っていた黒髪黒瞳の少年は俺たちを見つけ呆然と立ち尽くしていた。

月野が嬉しそうな顔をしたのがわかった。

俺は席を立って彼に近づいた。

「はじめまして、俺は神崎星野。よろしく。」

「俺は五十嵐誓。仲間がいるとは思わなかった、超嬉しい。」

彼はきつと、いい人だろう。

そついうのがちょっと会話しただけでわかってしまつ。

「仲間」それはきつと「人間」ということなんだろう…

彼が、俺たちが「天使」だと知つたら「仲間」とは言ってくれなくなるのだろうか…

彼と仲良くなるにつれて、彼が「天使」になりたかったということが分かった。

月野はその言葉を聞くたびに「人間」になりたかった自分と比べていただろう。

嫌に思ったのか、自分と同じに感じたのかはよくわからないが、月野が誓を大切に思ってることはわかった。

だから常に緊張していた 自分が天使だとばれないように…

「お前は一体何なんだ…？」

そう聞かれた月野はきつと誓なら受け入れてくれると思う反面、拒絶されることが怖かったのだろう。

そのあと、拒絶された月野は何を思ったのか…

壊れていないか…

俺は、月野を追いかけては

Blue rose 不可能のキス

「やっと見つけた…。」

「…誓。」

俺は星野ほしのに事情を聞いた後、月野が飛んでいった方向をひたすら走って追いかけた。

「あのさ!」「」

見事に八モってしまった…

月野の顔が若干赤い…

多分俺の顔も赤いだろう。

「誓からどうぞ。」

「ああ、あのささつきはごめん!」

俺は腰を直角に曲げて謝った。

「なんで誓があやまるの!あやまるのは私だよ。嘘ついててごめんなさい!」

月野も腰を曲げて俺に謝った。

「私、友達が欲しかったの。誓を騙して笑ったことなんて一度もな

いの！」

「うん、わかってる。星野に聞いた。お母さんのこととか昔のこととか仕事のこととか…」

「…軽蔑した？」

「は？」

「母親がラリツちゃった感じの人で、その人の為に怪しい仕事したりとか…」

「あいな！家族を悪く言うものじゃないし、どんな仕事でも一度引き受けたからには誇りをもて！…これはウチの母親の口癖」

月野はクスツとかわいらしく笑った。

「いいお母さんなんだね。そうだね、じゃあ…私のママは最高よ。天使に生まれた私たちをちゃんと育ててくれたし、少し弱い部分もあつたけどたくさん事を教えてくれたわ。」

そのあと月野は母親との思い出を俺に笑顔で話してくれた。

「私ね、人間に生まれたかったの…」

「うん、聞いた。」

「魔術なんて使えなければいいのって思っ。」

「俺は魔術は使えたらいいのって思うよ…」

月野はハツとした顔になった。

「ごめん。嫌味とかで言っただんじやないから…」

「わかってるよ。俺に魔術を使うのは不可能だってわかってるから。」

「不可能…。ねえ、青いバラって知ってる？」

「数年前に開発された新種の薔薇だろ？」

「うん。青いバラの花言葉はね“不可能、あり得ない”」

「…」

「だったの。けどね、開発されたことによって“奇跡、神の祝福”になったの。」

月野が俺に近づいてきたかと思うと急に唇に柔らかい感触が…

？

「あなたに神の祝福、奇跡が訪れますように…」

月野は俺から離れると、

「先戻ってるね」



と笑顔で言ってその場を去って行った。

唇に残った感触…

これは…

「キス？」

顔が火照ったのがわかった。

「キスなんて初めてだ…」

いろんなことがあつて頭から離れていたが、

魔術の試験は終わっていない…

## Conflict 独りの少女

俺が星野と樹理華がいるところに戻るとすでに月野が戻っていた。

無事でいてくれてほっとしたが、気まずい…

「なあ、誓。」

星野が俺に話しかける。

「ん?」

「悪魔あくまのことなんだけど、教師に知られたくないんだ。黙ってても  
らえないか?」

「俺は別にいいけど、他に仲間がいたりしないか?」

「それは平気だ。ここの地区に他に悪魔がいるという報告は受けて  
いないし、気配もない。」

「それならいいんだが…」

俺は樹理華が目を開けていることに気付いた。

「樹理華!! 平気か?」

樹理華はニコツと満面の笑みを作った。

「平気よ、どこも悪くないわ。」

樹理華はあの話を聞いたのだろうか…？

もしも聞いていないなら聞かない方がいいのではないか…？

俺はきつと無意識にそういう顔をしてしまっていたのだろう。

「…悪魔のこととか透明天使のこととか全部星野くん聞いたわ。」

俺の表情を読んだのか、樹理華は俺にそう言った。

「そっか…」

「だけど、どうでもいいじゃない。」

「は??？」

樹理華のその言葉に俺は心底驚いた。

「天使とか人間とか透明天使とか…元は人間よ。それに月野と星野くんがなんだって、あたしの友達なもの。あたしはちーくんが何だっつて受け止めるわよ。」

「じゅり…」

「樹理華！ありがとう！わたし、樹理華だーいすき！…！」

月野が樹理華に抱きついた。

「はは、ありがとう。あたしも月野大好きよ。」

樹理華は月野の頭をなでていた。

…月野は震えていた。

ここからじゃ見えないけど、きっと泣いているのだろう。

どれだけ怖かったのだろうか？

友達に拒絶されることが…

「誓は俺に言ってくれないの？」

星野が冗談っぽく言った。

「クスッ。俺と星野は親友だ。」

「さんきゅ。」

わざと冗談っぽく言っていたが、彼も彼で緊張していたのだろう。

「さて、友情を確かめ合ったところで空気を壊してわるいけど…できなさい！」

樹理華が後ろを振り向いて言った。

すると樹理華の視線の先から青い長い髪の女の子が出てきた。

どこかで見たことあるような顔立ちの少女は樹理華の方を向き、口を開いた。

「よくわかったじゃない、樹理華様。人間なんかとつるんでいても  
やっぱり聖天使ね。」

「来須風音…？」

俺はその名前を呼んだあとで来須風音に似ているんだ、と思った。  
直感的にできてしまったのだ。

元、緑の聖天使様の名前が…

「…彼女は来須水脈さん。風音様の娘さんよ。」

俺に見かねた樹理華が目の中の彼女について説明する。

「来須風音って…あの!？」

月野は驚いたようにその名前を口にした。

来須風音をこの国では知らない人はいないだろう。

現、緑の聖天使、五月雨樹理華を知らない人もいないだろうが来須  
風音はそれとは少し違う…

「そうよ、あたしの母親は来須風音よ。悪い？」

来須水脈、と紹介されたその少女はそう言った。

「それとも犯罪者の娘としてあたしを見るのかしら？」

そう、来須風音は犯罪者なのだ。

今も国に追われているが捕まってははいない…

「あの人（母さん）はあんたたち（人間）なんかの為に犯罪者になるなんて… ホントバカみたい。」

来須水脈は、母親を卑下するように言った。

来須風音は「人間を見下すなんておかしい、天使だって人間なのだから」という思想を持っている人で、それを国に訴えたところ、国への反逆とみなされ犯罪者となった。

それを「おかしい」という人はいなかったわけではないが、天使のほとんどは人間を見下しているので、来須風音の罪は消えなかった。

「樹理華様もあんな風になるんじゃないかって、あたし心配だわ。」

「はあ…。で、来須さん、一体なんのようかしら？」

「あはは。本気で言ってるの？今は魔術の試験中よ？水晶を貰いに来たにきまつてるじゃない。」

パチンッ

来須が指をはじいた瞬間、俺は水の球のなかにはいつていた。

「…うつ…ゲホッ。」

息が吸えなくなり、苦しくなっていく。

「ちーくん！！！！！！！！！！」

樹理華の悲鳴が聞こえる。

「待つて、今助けるから！…効かない。あたしの魔術（風）が効かない！！！！！！！！！！」

「いくら聖天使様でも、それなりの魔力をもった青天使に勝てるわけがないじゃない。コイツ助けたかったら水晶渡しなさい。早くしないと命の保証はできないわ。」

「ゴホッ…ゴホッ…」

やばい、意識が…

意識が飛ぶ寸前、星野が樹理華に耳打ちしているのが見えた…

「……………どこ？…樹理華！！！！？」

俺は意識を失った後、どうやら寝ていたらしい。

もうあたりは真っ暗だ。

水晶はどうなったのだろうか。

「あつ、目さめた？」

月光が髪で屈折している。

何回見ても思っ、

「綺麗だ…。」

透明で光を折り曲げる髪の毛…

「なあに？」

「俺、お前の髪、どこかで見たことある気がする…。」

「そっ？」

「うん…。じゃなくて来須さんは？」

月野は何故か少し口角を下げて言った。

「となりで寝てるじゃない…。」

「は？」

俺は勢いよく振り返った。

そこには青い髪を広げてスウスウ寝ている来須水脈がいた。

「なんで寝てるの？」



「誓が意識失くした後、樹理華が来須さんの気を引いている間に星野が雷うつたのよ。」

「雷!!!?」

「意識が飛ぶくらいだよ。ちゃんとコントロールできてるから大丈夫よ。」

ホッ。

「そっか、で月野はなんで髪の色が戻ってるんだ?」

「夜だったら目立たないかなって思ったんだけど…それに誓がきれいっていつてくれたし…」

「ん?聞こえない。」

俺がそっついと月野は少し怒ったようにそっぽを向いた。

「知らない!」

「ママ…おいてかないでよ…ママ…ママ…あたし独りはやだよ…」

となりで寝ていた来須が泣いていた。

泣きながら「ママ、ママ」と繰り返し言っていた。

そんな彼女をみて自分の母親を思い出したのか月野の目にも涙がたまっていた。

「水脈のママは今どこにいるんだろうね…?」

樹理華が頬に涙を這わせながら俺に問いかけた。

「…実は俺の家にいたりして。」

「…はあ?」

月野は潤った目をまん丸にしながら俺を見た。

「来須風音さんは俺の教育係でした。」

「…それ、本気で言ってるの?」

「まあ、本気だな。」

「なんで水脈に教えてあげなかったの?」

「…秘密。」

教えなかった理由は2つある。

まず風音さんの安全。

安易に国から逃亡中の彼女の場所をばらしてはいけない、と思ったから。

もうひとつは、来須水脈が風音さんに会いたいのかどうかわからなかったから。

彼女は口では風音さんを恨むようなことを言っていたし、親が犯罪者って結構言われてきたんだろう。

それでも本当に会いたいと思っているのなら、俺は後からでも来須に風音さんの居場所を教えるつもりだった。

「あつそ…」

月野は不機嫌にそういった。

「水脈つてさ、風音様はまおみやのせい*で*いじめられてるんだって…樹理華が言ってた。でもね、樹理華は風音様を尊敬してたから水脈を避けなかつたらしいの。」

でもさ、今回樹理華は私たちとチームを組んだじゃない？

だからね、裏切られた！って感じちゃったんだと思う。

結果、彼女はチームを組めなくて独りで頑張ったみたいだし。

あと、樹理華も風音様おかあさんみたいに人間にとられるのか！みたいな。

私ね、思うんだけど、水脈はちゃんと話せば私たちと仲良くなれるんじゃないかな。」

「ああ、きつとなれるよ。」

俺は横で寝ている来須の頭をそつと撫でた。

月野が何故かさらに不機嫌になったが、よくわからん。

コイツが起きたら、伝えてやるっ。

風音様の居場所を…

君は独りじゃないよ、と。

I hate the world あたしは決して救われない

この世が憎い…

あたしは自分が好きだった。

家族が好きだった。

聖天使のママのことも誇りに思っていた。

色は違うけど、あたしもママの娘だ。

それなりに強い力を持っていた。

友達からは頼られて、家族にも恵まれて、そんな幸せな日々だった。

なのに、あの日神様はあたしから全てを奪ったんだ。

ママの知り合いに「夢野<sup>ゆめの</sup>さん」というとてつもなく綺麗な女性がい  
た。

夢野さんの髪は黒かった。

夢野さんは「人間」だったのだ。

夢野さんはずっと病院にいて、ママは時々彼女の病室へあたしを連れて行った。

彼女はとても綺麗でどこか儂げな印象をもっていた。

「こんにちは水脈ちゃん」

彼女はいつもそうやって笑顔であいさつをしてくれた。

だけど、あたしが小4ぐらいのときだろうか、急に夢野さんが笑わなくなった。

いや、笑えなくなったのだ。

ママが風（魔術）で調べた結果、それは治療と言って国が彼女に投与していた薬のせいだった。

ママはそのことを訴えた。

すると、ママは「人間なんかに味方するのか？」と問われ「人間を見下すなんておかしい、天使だって人間なのだから」と言った。

それから間もなくしてママは聖天使を降ろされた。

それでもママは夢野さんの薬の件を訴え続けた。

ママが言うには、夢野さんにはあたしと同年の優秀な子供がいて、その子たちを国に縛り付けるために夢野さんを人質にしているらしい。

そのことをママは必死に皆に分かってもらおうとした。

だけど、理解してくれる天使は現れなかった。

その後も訴え続けたママはついに「国への反逆」として指名手配された。

ママがあたしの前から姿を消す寸前、こう言った。

「ママは間違っただけだと思ってるの。だけどそのことで水脈を傷つけてしまうかもしれない。だから、こういいなさい。あたしのママはろくでなしだ、と。」

それとね、ママはお友達の家にいるから。

そのお友達の子供ね、あなたと同じ年で人間なの。

もしも、どうしてもママに会いたくなったら、その子を探しなさい。

いい？どうしてもだからね。

あなたはきつとママを嫌いになるでしょう。

だけどね、ママは水脈を愛しているから。

愛しているから…。」

そういつてママは風のちからかぜのちからで消えた…

愛しているならあたしも連れて行け!!!

間違っただけだと思ってるならろくでなしとか言うな!!!

人間で同じ年なんてたくさんいるだろ！！！！

そうよ！ママなんて、だいつきらいよ！！！！

それからあたしの人生は狂った。

母親が犯罪者、それでいじめられ、今まで友達だった子たちも離れて行った。

あたしは独りになった。

アイツ（ママ）のせいだ！

いや、夢野さん（にんげん）のせいでママが変になったんだ！

人間も天使も この世界がだいつきらい！！！！

それでもあたしは頑張った。

成績だけでも見下されないように頑張った。

そんなおもしろくない生活をしているとき、ある噂を耳にした。

「緑の聖天使の後任が決まったって。」

「私たちと同じ年の女の子なんだって。」

「この学校にいるらしいぞ。」



別にママの後任だからって訳じゃない、単純に気になったのだ。

その女の子（聖天使）がどんな子なのかと。

結構離れたクラスにその子はいた。

さみだれじゅりか  
五月雨樹理華、いつも人間の男子とつるんでる緑天使。

その様子をあたしも何度か見たことがあった。

人間とつるんでるやつなんて嫌いだと思っていたけど、その後対面した彼女は変わっていた。

「じゅり」とかわいらしい愛称で呼ばれていた彼女は「樹理華様」とよばれ、いつも一緒にいた「ちーくん」はクラスから浮いていた。樹理華様の周りには人がいっぱいいたけど、彼女は誰にも心を開いてはいなかった。

樹理華様はあたしと同じ…独りなんだ。

それから、あたしは彼女を追いかけるようになった。

彼女はあたしにも話しかけてくれるけど、やっぱり壁を感じた。

あたしは樹理華様なら仲良くできるかもしれない、と思った。

だけど、樹理華様は誰とも仲良くしようと思わず、そのまま皆と違う中学に行った。

その後樹理華様と再会したのが高校。

偶然同じクラスになって、あたしはたくさん話しかけた。

入学して少しの間、ずっと一緒にいた。

だけど、樹理華様は隣のクラスで「ちーくん」を見つけた。

そこから、またあたしは独りになった。

神様はどうやらあたしを独りにしたいらしい。

皆きらい！だいつきらい！！！！

魔術試験もあたしは独りで受けた。

別に良かった。

だけど、人間たちと仲良くする樹理華様をみてあたしは壊れた。

ムカついた。

嫉妬した。

勝負を挑んだ。

結果はどうなったのだろうか…

ハッ！



声にならない声が出た。

あたしは声が出なくて口をパクパクさせた。

「ちーくん」は笑って言った。

「風音さんもねお前の事気になってるみたいだから、試験が終わったら俺の家に来てくれないか？」

「いく！！！！！！！」

あたしは自分でもびっくりするぐらいの早さで答えた。

『そのお友達の子供ね、あなたと同じ年で人間なの。』

こんなに近くにいたのか…

あたしは今、どうしてもママに会いたい。

どうしても…

どうしても言っ<sup>て</sup>やり<sup>たい</sup>言葉がある。

「ぶぞけんな！」

そう言いたい。

God forgive 親の残した絆

魔術試験は終わった。

結果、俺たちのてにいれた水晶は8個。

かなり優秀な方だ。

ランクの発表は、知能、体力のテストが終わってからの発表となる。

そして今、俺は自分の家の前にいる。

樹理華、月野、星野そして来須。

俺を入れて5人である。

親には「友人を連れていく」と言っている。

「ちーくんの家、ひさしぶり」

元気にそう言っているのは樹理華。

「誓の家って大きいんだね。」

ハモってそう言っているのは双子。

「ママに会えるんだね…」

泣きそうな目で言っているのは来須。

「じゃあ、行くか。」

俺は門を開けた。

「「「おかえりなさいませ、誓坊ちゃん。いらっしやませ。」

」

声をそろえて言う使用人。

樹理華以外は結構驚いていた。

「誓の家って本当にお金持だったんだね…。」

月野が言う。

「ただ、家が古いだけだよ。」

俺が言う。

来須は来須で「ママ、ママ。」とブツブツ言っている。

「いらっしやい。」

奥から俺の母親が出てきた。

「絆あつなさん、お久しぶりです。」

「久しぶりね、樹理華ちゃん。」

樹理華は以前にも母に何回かあったことがあるので顔なじみだ。

「美人…あつ、えつとはじめまして。誓君の同級生の神崎月野です。」

月野がぺこりと頭を下げる。

「月野の双子の兄の神崎星野です。」

星野も頭を下げる。

「…神崎…。…はじめまして、誓の母です。」

「私は誓君と小学校から同じだった来須水脈です。」

母は驚いたような表情を一瞬して、すぐに笑顔をつくり「はじめまして」と言った。

「風音ちゃんを呼んできなさい。」

「かしこまりました。」

母は来須の名字と顔立ちで察したのか近くにいた使用人に、風音さんを呼ぶよう命令した。

しばらくすると樹理華の髪より薄い緑色の髪の毛をした女性が出てきた。

「水脈…？水脈なの…!!?!？」

そう、彼女こそ来須水脈の母にして、元聖天使の来須風音。

「ママ！…ママ！…！！！」

来須は泣きながらママ、と何回も叫んでいた。

だから、誰もが次に起こる出来事を想像していなかった。

来須が風音さんに近づくと、つい抱擁し合っただろうなと思っ  
たが…

「ふざけんじゃねーぞ、バカかお前は！！！！」

来須が暴言とともに風音さんに平手打ちをした。

「ええええ？」

俺はつい声をあげて驚いてしまった。

「ごめんね…ごめんね。」

と泣いて謝る風音さんに、

「ごめんて済む話と済まない話があるんだよ！！！」

と来須がキレる。

「うわぁ…」

みんな呆然とその光景を見ている。



「さあ、親子の話しあいに入るなんて野暮よね。奥の部屋に行きましよう。」

母がそういい、みんな奥の部屋に移動した。

5年以上ぶりに再会したんだ。

話すことなんて山ほどあるだろう。

だから、今はそっとしておこう

「そつだ、樹理華ちゃん!!」

母が急に樹理華に話題を振った。

「はい？」

「まだ、言ってなかったから今言うわね。聖天使就任おめでとつ。」

「ありがとうございます！絆さん。」

その後、俺たちは客間に入った。

何故か星野だけ母に違う場所に来てほしいと言われ、母と別室にいる。

「星野くん、絆さんと何話してるんだろ？」

樹理華が不安そうな顔で言う。

「世間話？」

「バカじゃないの？世間話ならここですればいいでしょ！」

樹理華に逆ギレ？された。

「ねえ誓。」

黙っていた月野が話し始めた。

「誓のお母さんって、どこの学校出身の人？」

「いきなりだな、おい。確か幼稚園からエスカレーター式で大学まで行った、って聞いてるけど？」

「それって桜泉学園？」

「ああ、確かそんな感じの学校。」

月野の眉がピクツと動いた。

「失礼だけど、歳聞いてもいい？」

「別にいいけど、確か…36？」

月野がガタツと机を揺らした。

「本当に…？本当に！！！！？」

「本当だけど？とりあえず落ち着け。」

「うん…」

「で、何があった？」

「誓のお母さんね、あたしの名字に反応してたの。それでももしかしたら父さんとママの知り合いかもしれないと思って…あたしの両親も桜泉で36歳なの。父さんは生きてたら36ってことだけど。」

「なんか、親がらみの話し多くね？」

「私もそう思った。それってさ、なんか仕組みれてるんじゃないの？」

そのとき、ガラツと扉が開いた。

星野と母さんが入ってきた。

母さんの目は少し腫れていて泣いたようだった。

「星野くん！！」

樹理華が真っ先に星野に駆け寄った。

母さんが何かをじっと見ているようだった。

母さんの視線の先に月野がいた。

「ホントにそっくりね…夢野ちゃんに…」

月野が身体をピクツとさせた。

「夢野って…やっぱり…」

「うん。私はあなたたちのお母さん夢野ちゃんと、お父さんの宙そらくんと同級生だったの…。水脈ちゃんのお母さん、風音ちゃん、樹理華ちゃんのお母さんの麻理華まじかちゃんも…。」

「…樹理華のお母さんって」

確か、樹理華のお母さんは…

病死されていたはず…

「病死？…そんなわけないじゃない！麻理華まじかちゃんは殺されたのよ！…！」

殺された…？

「11の国」…！…！…！…！」

Ties of the past 宙の望む夢…

天使と人間が差別されないセカイ。

私はそこで暮らしていた。

それが当たり前のように…

これは私が婿をとり、誓を産む少し前の話…

桜泉学園。

ここは鳥かじ。

私はここから宙へは飛び立てない。

ここは地獄。

私は地上へは踏み出せない。

「…ずな！絆…！」

名前が呼ばれた…

「だれ…?」

「寝ぼけてるの!?!?ほら、もう帰る時間だよ!」

ああ綺麗な髪の色。

漆黒の髪とは正反対。

光を吸収しているかのように薄い緑・・・

「絆?」

「あつ、ごめん。ちょっといやな夢見てポーっとしてた…。」

彼女はクスツとかわいらしく笑った。

「もうみんな集まってるよ、いそいそ。」

「うん。」

桜泉学園。

ここは鳥かじ。

だけどあたしは、宙を飛べる。

みんなが手を引いてくれるから。

ここは地獄。

ただどあたしは、地上にいる。

みんなが手を引いてくれるから。

絆でつながったみんなが…

「おそいよ、絆！風音！」

うすい黄色の髪の彼女は、私達が集合場所につくなりそうだった。

「ごめんね麻理華。」

「いいよ、べつに！それよりさ、今日どこかに行かない？」

麻理華は私達二人と後ろにいる四人に声をかけた。

「俺はどこでもいい。」

綺麗な青い髪の男子が言う。

「もお！涼はそういうのばかり。」

麻理華が涼に怒る。

「じゃあ映画は？」

私と同じ漆黒の髪を持った男子が言う。

「東<sup>あずま</sup>みたい映画でもあるの？」

私が東に問う。

「いや、特にないんだけど…。」

「あの新しく始まった恋愛映画なんてどうかな？」

ひとときわ顔立ちのよく真っ黒な髪の男子が言う。

その発案にとびきりの黒髪の美少女が横でうなずく。

「なーに、宙と夢野はいちやつきたいのかあ」

それを麻理華が冷やかに。

あはは、と華麗にスルーする宙に比べ、顔を真っ赤にしながら夢野は照れている。

こんな毎日。

変わらない毎日。

私をみんなが鳥かごから出してくれた。

毎日が楽しくて仕方なかった。

結局その日は映画を見て帰って、寄り道したことが家の人にばれて、



こっぴどくしかられた。

前までの私はしかられるのが怖かった。

だけど今はみんながいる。

絆は強い。

誓いを生むことになる「絆」<sup>わたし</sup>、後の聖天使となる「風音」、風音の旦那となる「涼」、後々の聖天使になる子<sup>しゅりが</sup>を産む「麻理華」、私の旦那となる「東」…

そして「夢野」と「宙」

出会わなければ私はまだ鳥かごの中だろうか…

鳥かごの中で幸せに暮らしているのだろうか…

Battle of the past 婚約と夢…

私達は18歳になった。

男も結婚できる年齢。

そんな年齢になってしまった。

私には婚約者がいた。

とても仲のいい人間、おとみやそら音宇宙だ。

私の家も宙の家もかなりの名家なのだ。

立場的にはいからし五十嵐の方が上であり、音宮を成長株とみなした五十嵐が決めた婚約だ。

だけど、彼には愛している少女がいた。

私も彼女を愛していた。

誰もが目を奪われる容姿の彼女の名はかたみやゆめの神崎夢野。

普通の人間だ。

夢野は宙を愛していた。

そう、二人は愛し合っていた。

以前の私ならこの結婚で音宮を思う存分利用しようと考えたはずだ。ただ今私の私は違う。

私は自分の家の発展より、彼らに幸せになってもらいたかった。

だから私は自分の家の権力を使い、婚約を破棄した。

婚約を破棄するが、五十嵐は音宮を金銭面で援助し続ける。

その条件として次男である宙を神崎家の婿養子にする。

という約束をさせた。

この私の権力行使により、宙と夢野は結婚した。

人間国家の3代名家のうちの一家「音宮」と一般の家の娘が結婚するなんて、まず無理だと思っていた二人は駆け落ちの準備までしていた。

私が宙の父親の署名のある約束の紙を見せると二人は泣きながら喜んで「ありがとう」と私に言った。

ちなみになぜ嫁入りではなく婿養子なのかというと、一般の人間が名家に嫁いで幸せに暮らせるとは思えなかったからだ。

そして私がこんなに自由に五十嵐の権力を使えるのは、先代である私の両親が他界したからだ。

学生結婚した二人は、毎日幸せそうな笑顔で登校していた。

そんなある日、宙と夢野は二人で帰り、麻理華は先生に呼び出され、風音と涼は委員会で、私は東と二人だけで帰ることになった。

「絆は結局、家継いだんだっけ？」

「うん、親がいなくなって兄弟もいないから自動的に私が継ぐことになった。」

「ほかに家族は？」

「いないわ。祖父母も全員他界しているし、両親とも一人っ子だったから。」

「じゃあ、一人なのか？」

「そうね、家ではね。だけど学校にきたらみんないるし。」

「さみしくないのか？」

うん…って答えたほうがいいんだよね。

さみしいなんて言っただってどうにもならないし、心配させるだけだ。

それに学校の時間はとても楽しいし。

家にいる数時間だけ、数時間だけ我慢すればいいの。

だから…別にさみしくなんか…さみしくなんか…

頬がぬれた気がした。

雨かな？

おかしいな晴れてるよ。

でもぬれてる。

「さみしいなら、さみしいって言っていいんだぞ。」

東はそういつて私の目をぬぐった。

ああ、私は泣いていたんだ。

「さみしいよ…さみしいよ…でも、さみしいって言ったらどうにかなるの！！！？さみしいよ！！さみしいって言ったって何も変わらないじゃない！」

一瞬何がおきているのかわからなかった…

「あずま…？」「

私は東の胸の中にいた。

あたたかい…

「あのさ、結婚しない？」

東は私を抱きながら言った。

「俺がさ家族になるよ。そしたら家でもさみしくないだろ？」

わたしは泣いた。

うれし泣きだったんだろうか、安心して涙が出てきたんだろうか。

泣きはらした私は東のプロポーズを受けた。

東は私の家のことを気遣って婿養子として私の家に来てくれた。

誰もいない広い家だったこの家はセカイで一番愛しい人のいる素敵な空間へと変わった。

こんな幸せな時間。

夢にさえ見たことのない幸せ。

それはこの後くる絶望の反動？

それとも絶望が幸せの反動？

幼稚園から大学まである学園、桜泉学園。

俺は中等部からこの学園に編入してきた。

人間が差別されないすばらしい学園と聞いて楽しみにしていた。

実際、そこは天国のような場所だった。

小学校のころは「人間」と言われ、友人が一人もいなかったから「人間」と差別されないそこは天国のようだった。

ただ、地獄をみない限り天国のよさはわからないのだろう。

同じクラスの人間の女の子。

彼女はセカイに絶望している目をしていた。

聞いた話によると彼女は幼稚園からこの学園にいるという。

彼女は知らないんだ、ここがどれだけ俺達にとっていい場所なのか。

彼女の家は人間三代名家のうち、もっとも権力のある家だそうだ。

彼女は家に縛られているのだろうか？

俺は彼女が気になっていた。

勉強も運動も完璧にこなす彼女が時折みせる表情。

彼女は何を考えているのだろうか…

気になる。

気になるなら話しかければいい。

その考えにいたったのは高校にあがったすぐの時だった。

「ねえ五十嵐さん。」

話しかけた！初めて話したぞ！

「なあに小田原おだわらくん？」

俺の名前知ってたんだ。

「あの子…」

「友達にならない？」

とっさにでてきたのがその言葉だった。

どこの小学生だよ！

言ったあとに激しく後悔した。

「あはは、なにそれ。」



彼女は確かにそうだった。

「え？」

「お友達になりませんかなんて言う人いたんだ。」

「そんなかしこまった言い方はしてないだろ。」

「同じことじゃない。」

彼女は思ったより話しかけやすい人間のようだ。

「で、友達になってくれるの？」

彼女は口角をあげ、目を細めて

「いいよ」

といった。

俺はその笑顔で彼女に惚れてしまった。

そこから俺の片思いは始まった。

彼女は世間知らずな上に他人と話すのが苦手、さらに不器用と人の付き合い方がまったくわからない人だった。

そこに家からの教えが重なって、寄り付きにくい感じの人になっていた。

俺は彼女にいろんなことをおしえた。

友人同士は下の名前で呼び合う、といったら俺のことを東と呼ぶようになった。

それから、俺達の周りには人が増え楽しい毎日を過ごしていた。

そんなある日、絆の両親が事故にあったと聞いた。

数日は少し暗かったが、今では元通りだ。

そして18歳となったある日、友人の宙と夢野が結婚することになった。

あとから聞いた話だが、絆と宙は婚約者だったらしいが、絆の計らいで二人は結婚ができたそうだ。

二人が結婚した直後、絆が中学生のころよく見せた表情をしているのがわかった。

彼女の視線の先は新婚の二人だった。

俺は5年の時を経てその表情の正体がわかった。

「憧れ」

絆は一人でいたとき、周りの子に憧れていたんだ。

友人に。

そして、今は何に憧れているんだろう…

「ほかに家族は？」

「いないわ。祖父母も全員他界しているし、両親とも一人っ子だったから。」

「じゃあ、一人なのか？」

「そうね、家ではね。だけど学校にきたらみんないるし。」

「さみしくないのか？」

彼女は涙を流した。

ああ、絆は「家族」に憧れたんだろう。

絆に「友人」を与えたのは俺だ。

次も絆を言わせたい。

涙を流させたくない。

「あのさ、結婚しない？」

「俺がさ家族になるよ。そしたら家でもさみしくないだろう？」

光り輝く太陽が東から昇り、西に沈みかけていた。

俺は太陽にはならない。

俺は沈まない。

知ってる？月は見えていないと思っても、絶対にあるんだ。

新月だって、見えないだけでそこにある。

俺は君の月になる。

君から見えなくても、俺は君を見てる。

俺は月になる、そう誓うよ。

Mistakes of the past 綺麗な華の小さな悲鳴

「いいなあ！あたしも結婚したい！！」

私と東は宙と夢野の後を追うようにすぐに婚姻届を提出した。

私達の結婚は特に反対されることもなく、スムーズに行われた。

最近風音と涼の委員会の招集が多いのと、私達が結婚をしたことに気を使い一人で行動したりすることが多くなった麻理華は憧れのまなざしで私を見てきた。

「結婚してるってどんな気分？セカイがピンクに染まってますかー？」

麻理華は茶化しながらも私達の結婚を一番祝福してくれていた。

「麻理華にもそのうちいい男の人が絶対見つかると思うー！」

私は心の底からそう思っていた。

麻理華は年の割りに幼さが目立つけど、女の私から見ても魅力的だった。

だから彼女はきつと幸せになれる、そう思っていた。

『高等部3年、五月雨麻理華さん。高等部3年、五月雨麻理華さん。至急職員室までお越しください。』

校内放送で彼女の名前が呼ばれた。

「また課題の提出忘れたんじゃないの？」

私は笑いながらいった。

「…そうかもね。」

いつもなら笑いながら怒るか、本当に忘れているかなのに彼女は笑っていないかった。

彼女の目には恐怖が映っていた。

「麻理華？」

「ごめん、行ってくるね。」

麻理華はニコリともせず、そういつて教室から出て行った。

そういえば最近麻理華が呼び出されることが多い気がする。

私がプロポーズされたあの日も確か麻理華は先生に呼び出されていた。

麻理華はその日を境に毎日のように呼び出されていた。

その呼び出しは卒業まで続いていた。

「今日で卒業だね。」

風音が言った。

「もうみんなと会ってから3年経ったんだね。」

私は夢野の言葉に内心驚いていた。

私のこの3年間は10年、いや20年のように長かった。

毎日が楽しくて仕方なかった日々。

それも今日でおしまい。

「それで、話があるんだけど。」

そう切り出してきたのは涼しやう

「あのお、俺と風音結婚することにした。」

涼と風音は頬を紅くそめながら言った。

正直驚きはしなかった。

仲が一際よかったし、なによりお似合いだ。

「おめでと〜。」

わたしは自然に浮かんだ笑顔でそういった。

これが私の高等部での最後。

周りのみんなが涙を浮かべている中、私達は笑顔で門をくぐった。

そして、大学部へと進学した…

大学部は自由だった。

ここは本当に桜泉なんだろうかと思うぐらい自由だった。

私達は7人で楽しく卒業までやっていける、そう思っていた。

楽しかった。

だから気づけなかったんだ。

耳を傾けなきゃ聞こえない悲鳴に

『大学部1年、五月雨樹理華さん。大学部1年、五月雨樹理華さん。至急職員室までお越しください。』



Past the end of 「悪魔」は「天使」

「この放送って、桜泉全体で流してることよね？」

「なんで？」

「高等部のときも思ったけど、大学部だけで流すなら学部の名前でいいじゃない。」

「たしかに」

そんなやり取りを聞いた。

確かにこの放送には不可解な点がいくつかあると思う。

第一、なんで麻理華はこんなに頻繁に呼び出されているんだろうか？

そんな当たり前なことになんで早く気づけなかったんだろうか…

それを私は15年以上後悔することになる。

気づいたのが遅すぎた。

私が気づいたとき…

大学に入って半年がたったある日のこと。

「ねえ麻理華？先生の話ってなんだったの？」

私はそれとなく聞いてみた。

「特になんでもなかったよ。」

それが彼女のいつもの答え。

だけど今回は違った。

「絆には関係ないじゃない!!!」

いつもの彼女では想像もできないくらいの大声で怒鳴られてしまった。

いつもは温和で幼い彼女が、何もなくてこんなことを言うわけがないと思った私は、後をつけてみることにした。

「やあ五月雨<sup>さみだれ</sup>くん、調子はどうかね？」

いかにも博士っぽい緑天使が麻理華に尋ねた。

「平気です。」

麻理華から笑顔が消えていた。

「やっ!」

博士のような格好をしている中年のおじさんは、急に麻理華のおな

かを撫で始めた。

「やめてください!」

「いいじゃないか、自分の子を感じたいんだよ。」

…自分の子?

「この子はあなたの子なんかじゃない!私だけの子です!」

麻理華は男性の手を払って叫んだ。

麻理華は妊娠しているの…?」

「だが、生まれてくる子は私の特徴を受け持った緑天使だ。」

男性はニヤリと笑いながら言った。

気持ち悪い。

「私と一緒に最強の天使を創ろうじゃないか。」

「私の子供は物じゃない!」

麻理華は妊娠している。

それは確かなようだ。

この男との間の子供なんだろうか…

「私は悪魔に対抗できる能力の開発の手伝いをするって言っただけなのに……」

麻理華はないているようだった。

「悪魔は天使よ！天使なんて言っただけは悪魔のようだよ。」

悪魔……？

「あなたもその天使ではないですか。」

「そうよ、私も天使よ。悪魔に勝てるって聞いて何も聞かずに承諾した。私は悪魔よ。天使は結局みんな悪魔なのよ！！」

「あながち間違っただけじゃないですね。」

「“悪魔”は“天使”ですから。」

私はその場から立ち去った。

いや、その場から逃げ出した。

その後、胃液が出るまでもどしてしまった。

最初は麻理華のことがショックなんだろうと思いき、特に何もしなかったが、嘔吐は何日も続いた。

東に言われ医者に言ったら産婦人科を紹介され少し気まずい雰囲気になった。

そう、私も妊娠していた。

麻理華と同じように妊娠していた。

その後1ヶ月おきに風音、夢野も妊娠した。

麻理華は最初こそ私達に隠していたが、おなかが膨らみ始めると「遊びまくったら子供できちゃった。」とふざけて妊娠を告げてきた。

目だけはまだ笑っていなかった。

麻理華のことは深く言及はしなかった。

隠したいこともあるだろうから。

だけど話してきてくれたら思う存分聞いてあげようと思っていた。

なのに…

麻理華は死んだ。

表面上は病死とされている。

麻理華は娘、樹理華を残して死んだ。

樹理華を姉に預けて…

What's wrong with me? 最期の言葉

どこで何を間違えたんだろう？

あの時、無理やりでも麻理華の子供をおろさせとけばよかったのかな？

私は今、笑いながら止まっている麻理華と対面している。

どうして・・・？

「こんな若いのに…」

「病気で…」

「愁傷様です。」

違う。

麻理華は病んでなんかいない。

病んでいたら子供を無事に産めるはずがない。

一体どうして…

麻理華のお姉さんは枯れてしまっているのか涙を流していない。

「これ以上麻理華を苦しめないで。」

検死にかけられそうになったとき、樹理華を抱いてそう叫んでいたお姉さん。

麻理華にもそのうちいい男の人が絶対見つかると思う！

確信を持って言ったその言葉。

叶わなかったその願い。

私には…

麻理華を救うことはできないんだ…

私達は麻理華との別れを実感できなかった。

もう1ヶ月がたつ。

私のおなかかなり大きくなって、いつ産まれてもいいぐらいだ。

本当なら幸せなんだろうな。

でも麻理華がない。

こんなセカイじゃない。

東がいて、夢野と宙がいて、風音と涼がいて、麻理華がいる。



それが少しでも壊れてしまう。

壊れてしまった。

「こんなセカイなんて…いらな」

『本当にこのセカイはいらないの？』

麻理華の声が聞こえる。

「麻理華…？」

『このセカイは絆にとって無意味なの？』

「だって麻理華がいないんだもん！！」

『どうして私はいないの？』

「どうしてって…」

『私はねずっと見てるの。』

絆が子供を産んで、夢野と宙の子も無事に産まれて、風音と涼の子も産まれるの。

それでね、みんな樹理華と同じ年なの。

私達みたいに支えあうの。

素敵でしょ？

素敵なセカイでしょ？

だからいらなん言っちゃだめだよ。

ことだま 言葉には力があるんだから。

じゃあ、そろそろいくな。

そうだ、私のこと忘れないでほしいな。

それと

私は に殺された。』

「絆……!」

東の声で目が覚めた。

「……、ど……?」

「病院だよ、子供が産まれるって。」

『絆が子供を産んで、夢野と宙の子も無事に産まれて、風音と涼の子も産まれるの。それでね、みんな樹理華と同じ年なの。』

「ねえ東。」

「なに?」

「夢野も風音も妊娠してないわよね？」

「何いつてるの？」

やっぱりか、私の記憶では夢野も風音も妊娠なんかしていない。

「夢野も風音も、もう出産予定日まですぐだよ？」

東は私をからかっているんだろうか…

違う…これは…

「お前と一緒に母親講座とかいってただろ？」

「そうだね。」

言霊か。

麻理華の最期の言葉を神が叶えたのだろうか。

じゃあ、私は、

「私は麻理華を救う。」

どんな方法でもいい、麻理華を絶対に救う。」

東はそんな私を優しく見つめ、ただ言った。

「そうだな。」



D r e a m   w a k e   u p   天使と人と死神と…

麻理華がいなくなってから、夢野と風音は出産を終えた。

風音の娘は父と同じ青天使。

水脈と名づけられた。

水脈を産んだ風音は、先代の死から急遽緑の聖天使に任命された。

夢野の産んだ子供たちは…

天使だった。

私達は自分の子供を人間にしようと決めていた。

そもそも私の家は人間しか産んではいけなかったが、なにより人間でよかったと思うこともおかつたからだ。

私は桜泉とりかしのなかしかしらない。

だから誓を人間にしたことを後で後悔することになる。

夢野も天使処置は行っていないはず。

なのに生まれてきたのだ。

神の使い…

オリジナル  
天使が。

夢野は研究所に回される生活を送り、宙は必死に夢野を守ろうとしていた。

守ろうとしていた…

なのに彼は…

失踪した。

夢野は心を正常に保てなくなっていった。

宇宙と夢。

宙と夢野。

子供は星野と月野。

そう生まれる前から決めていた幸せな二人が天使によって引き裂かれた。

宙はいまだに見つかっていない。

どこでなにをしているのだろうか…

壊れた夢野を研究者達はまるで物のように扱った。

「人間が…」

「人間の分際で…」

私達は知らなかった。

桜泉学園とりかは安全なんだと。

外きけんにでて知った。

とりかごにうんざりしていた私達は安全すぎて気づけなかったんだ。

人間と天使を平等に扱うところなんて無い。

それを知った風音は訴え続けた。

聖天使という立場から国へ訴え続けた。

私もそれを全力で応援した。

だけど…

国は風音を排除した。

天使のくせに人間なんかとつるんでいるから…

風音を私の家にかくまうのと同時に夢野を連れ出そうとした。

病院に風音の能力で忍び込み夢野の病室まで行った。

「どつやって連れ出す?」

「風音の力で夢野を浮かせられないかしら？」

「了解。」

風音は詠唱なしで夢野の体を浮かせた。

「じゃあ行きましょう。」

私達が病室を後にしようとする時…

「まって、何かいる。」

何かの気配がした。

振り返ると…

そこには黒い何かがあった。

「なに…？」

「オマエタチハシニタイノカ？オマエタチハコロサレタイノカ？」

お前達は死にたいのか、お前達は殺されたいのか。

黒い物体は私達にそう問いかけた。

「何？」

私は内心すごく怖かった。



「ただ怖がつてるだけじゃ進めない。」

「ソノムスメガココカラサルコト、スナワチセカイノオワリ。」

「何を言っているんだらうか…？」

「テンシハミナ、オチル。ソシテワレワエノナカマトナル。」

「天使が墮ちる…？」

「アアソウダ。ワタシハマダジガヲモツテイルガ、ソウナガクハナイ。ハヤクムスメヲオイテココカラサレ。」

「あなたはなんなの？」

「風音が問いかける。」

「ワタシハ、ダテンシ。モウスグアクマトナルダロウ。イソゲ。」

「言い終わると墮天使と名乗った物体がうめき出した。」

「ウワア…ギャー…。オノレニンゲン。コロスコロスコロスコロス。」

「絆、下がって！」

「うん！」

「我欲するは敵を貫く力…風よ！我が敵を貫け！！！！！」

風音が詠唱を終えると突風が黒い物体を襲った。

「やった…?」

「イタイイタイイタイイタイ!!!」

「まだ生きてる?」

「我欲するは敵を粉碎する力、神より受けし力、かの者への肃清として顕現させる…」

粉碎魔法。

かなり高度で詠唱が長い。

だけど詠唱さえ終わればどんな敵でも倒す力を持つ。

だから詠唱時間を稼がないと!

「あなたの望みは何なの?」

足が震えている。

怖い、怖い!!

「ニンゲンクロス」

近づいてくる、

怖い！怖いよ！！

まだなの！！

「あなたは何で人間を憎むの？」

「ニンゲンクロス」

だめだ、逃げないと。

でも逃げたら詠唱中の風音のところへ行ってしまう。

がんばれ私！！

「人を殺したって意味なんて無いわ！」

もうだめだ。

私もここで死ぬのかな…

アクマに殺されるのかな…

麻理華…

「お前の居場所はここじゃない。帰れ！」

聞きなれた声。

最近は何も聞いていなかったな…

この声は…

「宙!？」

黒いローブをかぶった宙が私の前に立っていた。

「宙、なんで!!?!？」

「ニンゲンコロス」

「あいにくと俺は人間じゃないんでね。」

そういつと宙は手から鎌をだし、アクマを切った。

「オマエシニガミ…」

そういつとアクマは消えた。

「宙?宙よね。どこ行ってたのよ!みんな心配してたんだから!」

風音が詠唱をやめこっちに走ってくる。

「悪い、俺はもうここにいい存在じゃない。じゃあ、夢野と子供を頼む…」

それだけ言つと宙は消えてしまった。

まるで手品のようにその場から消えた。

「どいついつとっ…」

「私に聞かれても…」

『シニガミ』、アクマはそういつていた。

『死神』…

『悪魔』…

『私は悪魔に対抗できる能力の開発を…』

麻理華が博士に言っていた。

「悪魔ってなんなの…？死神ってなんなの…？」

これが私の物語。

これがあなたたちの親の物語。

D r e a m   w a k e   u p   天使と人と死神と…（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

> i 3 1 2 9 7 — 3 7 8 9 <

ラクガキ提供は小萌さんです。

10分未満の作品だとかw

小都吹片瀬

ことがきかたせ

Listen to the story 繰り返される運命

いがらしちかい  
五十嵐誓、16歳。人間。

かんざきつきの  
神崎月野、16歳。透明天使。

かんざきほしの  
神崎星野、16歳。透明天使。

さみたれじゆりか  
五月雨樹理華、16歳。緑聖天使。

くすのしみお  
来須水脈、15歳。青天使。

俺達は、出会う運命だったんだ…

「今日はもう遅いからみんな泊まっていくといいわ。」

頭が混乱している俺達に母さんはそう言った。

それはまずいだろ、そう言いかけたが、母さんとここにいるメンバ  
ーの親は20年来の親友なのだった。

親友の家に子供を泊めるのを反対する親はいないだろう。

客間はたくさんあるが、俺と星野は俺の部屋で一緒に寝ることにし  
た。

「なあ誓。」

暗い部屋で星野がつぶやく。

「なんだ？」

「どう思った？」

さっきの話のことだろう。

どう思ったも何も…

「よくわからない。」

本当によくわからなかった。

「星野はどう思ったんだ？」

「俺は…不謹慎かもしれないけど、死んだってきかされてた父親が生きてるって知ってちよつと喜んでる。」

父親…宙さんのことだろう。

「死神か…。」

星野はそつつぶやいて寝息を立て始めた。

死神…

死神とはなんなんだろうか…？

悪魔とはなんなんだろうか…？



「ねえ樹理華。」

「なあに？」

私はよこで寝ている樹理華に声をかけた。

「話を聞いてどう思った？」

「よくわからない…けど私は望まれて生まれてきた子供ではなかつたんだって…」

「そっか…」

「お父さんみつかるといいね…」

苦しいだろうに、樹理華は一生懸命作った笑顔で私に言った。

「ありがとう。」

「これからだ、これからが始まりだよ。」

終わるのか、始まるのか。

それは、君達次第だよ。」

暗闇の中、黒いローブを羽織った男性は、鏡を我が子を見る親の優しい眼差しで見ながらそう呟いた。

過去編がおわったーーーーー！

次は…何編だろww

とりあえず、いつも読んでくれる皆さんありがとうございます。

そういえば、女性ですか男性ですか？との質問をもらったのですが、僕ってそんなに女性っぽいですか？

とりあえず、まだつづきまーす！

> i 3 1 3 2 4 — 3 7 8 9 <

そういえば、この小説を元にしたゲームを製作します。

できあがりしだいフリーゲームとして無料ダウンロードできるようにします。

概要はいわゆるギャルゲーになるんでしょうか。

ユーザーは五十嵐誓になって〜

みたいな内容になると思います。

ぶっちゃけ、ゲーム自体はほとんどできあがってたりするんですけど…

イラストがない…

立ち絵数パターンを無償提供してくださる方ぼしゅうしてまーす。

提供してくれた方のお名前はちゃんとゲームに入りマース。

応募、質問などは

kotobuki|katasee@yahoo.co.jp

まで。

メール送ってくださったら、メッセージを送っていただけると幸いです。

では^^

What will change 壊れだした日常

パパなの？本当にパパなの？僕が誰だかわかるの？」

『星野だろ？いつも月野を守ってくれてありがとな。』

うん。うちは男が僕だけだから、僕がママも月野も守るんだ。

『そうか…大きくなったな…じゃあ、もう行くね。』

待って！

「待って！行かないで！！パパ！！」

「え…息子？」

俺が飛び起きると隣では誓が寝ていて、ドアの近くに知らない男の人が立っていた。

「だれ…？」

とりあえず誰だか聞いておいたほうがいいだろう。

「え？パパ？」

その人はまじめそうな顔で言った。

ていうか俺、知らない人にパパとか言っちゃったよ。

どうしよ、地味にイタイ。

「あ…あのう…」

俺がキョドっているのを見てその人は笑った。

「冗談だよ。はじめまして、パパの友達の五十嵐東いがらしあずまです。」

俺のパパ…父さんの友達の東さんってことは、

「あつ、誓のお父さんでしたか…」

「そうだよ。似てるだろ!？」

東さんはニコニコしながら自分の頬を指でつつく。

正直にいたほうがいいんだろうか。

でも、ここまで言っているしお世辞くらいは言った方がいいんだろうか。

少し悩んで東さんの顔を見ると、さっきまでの笑顔が嘘みたいに沈んでいた。

「知ってるよ…俺がちかくんと似てないことなんて知ってるもん! ちかくんは絆に似ちゃったんだもん! 似て無くて僕のかわいい息子だもん!」

沈んでいたと思ったら急に大声を上げてちかくんを語りだした。

「ちかくんはね、こつ見えても努力家でね、こつ思いやりみたいなのがねあってモフ！」

「うるせえ……」

何かが東さんの顔に当たったと思ったら枕だった。

寝起きの誓が投げた……

「ちつかくーん！おはよう！パパだよ！！！」

東さんは頭から花を飛ばして誓に近寄る。

「こつちくんなきしょくわりい！」

それを誓が俺の使っていた枕で振り払う。

親子っていいな……。

そんな目で二人を見ていたのが、二人にはわかったのだろう。

誓の察しがいいのは父親似か。

「星野もやるか？」

「ちかくん！パパねさつき星くん！ねモギユ」

あ、いけない反射的にさつき誓が投げた枕を投げてしまった。

「星野……」

誓がなんともいえない顔で俺をみる。

父親に暴力をふるわれるのはやはり嫌なものなんだろう。

どうやって謝ったらいいんだろうか。

「あの…誓…」

「星野！大丈夫か？」

「え？」

「東ひがしになんかされたんじゃないのか？」

ああ、さっきの誓の顔は心配だったのか…

覚えておかなくては。

「なんにもされてないよ。」

俺はできる限りの笑顔で笑った。

「ちかくん…俺の心配は？」

「うるせ！帰れ！」

「…ご俺の家…」

「母さんの家にお前が居候してるんだよ！」



「うわぁーん！きずなーーーー！！」

東さんは走って部屋を出て行った。

遠くで絆さんの「うるさい！」という声が聞こえたが、知らないフリをしよう。

「父親っていいな。」

「あれを見てそう思ったのか？」

誓は心底いやそうな顔をした。

「クスツ。思った。」

例えば、俺の父親が帰ってきたとしよう。

俺は向かえいれられるだろうか？

多分答えはノー。

拒絶をしてしまう。

宙のせいあいつで母さんが狂ってしまったのなら許せない。

だけど…

一度でいいから会って話して、こつやってケンカをしてみたい。

「教授、そろそろタイムリミットです。」

白衣を着た若い女が、同じように白衣を着た中年の男に声をかける。

「では、始めようか。」

「はい。」

「われわれ天使だけの世界を創るんだ。」

## Angels and humans 異なるもの

あの日、母さんが俺たちに過去を話してくれてから3日がたった。

連休だからあれからみんなには会っていない。

それぞれ思うこともあるだろうから、こっちからは連絡を取らないようにしている。

きっとみんな同じことを考えて、自分から連絡を取らないようにしているんだろうな。

親は仕事だし、風音さんは水脈の家に行っているしものすごくヒマだ。

TVを見ようと思ひ電源を入れる。

赤い髪をしたアナウンサー、赤天使だろう。

「緊急連絡、緊急連絡。日本中に異様な生物が多数、出没しています。現場の様子です。現場の山本さん。」

異様な生物？

「こちら現場です。見てください、黒いものがたくさん動いています。動いている以上生物と考えるのが…」

黒いもの…!!!



ブーブー。

携帯が震えた。

常にマナーモードにしている携帯。

サブディスプレイの表示は“樹理華”。

樹理華もあいつに気づいたのだろうか。

メールを開く。

「ちーくん。テレビ見ていますか？あいつの仲間らしきものがいっぱい現れたそうです。これから4大天使で議論をしてきます。ちーくんは危ないので家から出ないでください。じゅり」

そういえば聖天使に問題がわたされたとかニュースでやってたな。

家にいろっことは家にいる限り安全っことでいいんだよな？

とりあえず窓は閉めた方がいいかな、と思い俺は家中の窓を閉めてまわる。

連休中だからお手伝いさんは一人もいない。

広い家に一人っっていうのもなんか新鮮だ。

とりあえずテレビで新しい情報がでるのを待っておこうか…。

そんなことを考え、俺は消したテレビの電源をつけようとリモコンにてを伸ばした。

「オマエハチカラガホシクハナイカ？」

後ろから声がした。

お前は力が欲しくはないか？

答えは最も簡単。

力は欲しい。

俺は魔術が使えない、から。

いけない、それよりも声の主は誰なのか…

それを探るのが現状、もつともいい策だろう。

「だれだ？」

俺は勇気を振り絞って後ろをむく。

アイツだ。

そこには黒い物体があつた。

双子の話では“悪魔”と呼ばれるもの。

「ニンゲン、オマエハチカラヲノゾムカ？」

「俺は力が欲しい…。」

「ノゾミヲカナエヨウ。オマエハアイツニエラバレタ…」

そのとき玄関から物音がした。

「誓！大丈夫！！？」

月野だ。

俺を心配して来てくれたのだろう。

「悪魔！！お前！誓になにしてる！！」

月野の髪の色が黒から白、透明になった。

「燃やしてやる！」

月野が手を合わせ、炎をだす。

「おい、月野！」

俺は月野の名前を呼んだが月野は振り向かない。

「ツメ 剣！！！！」

月野がそう叫ぶと炎は剣の形になって悪魔を貫いた。

「アツイ…アツイ…イタイ…。」

「おい！お前！あいつって誰だ！！！！」

俺は悪魔に向かって叫んだ。

表情なんてないのに俺にはそいつが笑ったように見えた。

「ジキニワカル。」

そう言うとそいつは消えた。

「ニュース速報です。町に大量発生した危険生物についてです。国は彼らを“悪魔”と名づけました。悪魔は天使反対派の人間によって創られたと国は見ています。よって、国中の人間に逮捕状がでました。人間は速やかに出頭してください。また、天使の皆さんは人間を見つげ次第、国への連絡をお願い致します。」



E s c a p e   m u s t   b e   人 間 狩 り

「は？」

俺にはテレビが何を言っているのかわからなかった。

正確にはテレビではなくアナウンサーだがそんなことはどうでもいい。

「なにを言っているんだ？」

俺が月野の顔を見ようとしたとき携帯が鳴った。

表示は樹理華。

メールは

『いそいで逃げて、殺される。』

の一文だけだった。

「月野…これ」

俺は信じられないような顔でテレビを見ている月野に携帯の画面を見せた。

「…これ樹理華からよね。」

月野は携帯を指差しおびえるように言った。

「うん、樹理華から。」

「殺されるって…」

月野はテレビと携帯の両方を見比べている。

自慢ではないが俺は頭の回転が速い。

月野も早い方だと思う。

それを見越しての樹理華からのメールだと考えるのが一番利口だろう。

「ようは、人間を捕まえて殺そうとしているわけね…。」

「多分な。」

テレビのニュースと樹理華からのメール、二つから考えられるのは国が人間を排除しようとしている、ということだ。

そこで俺は重大なことを思い出す。

「月野…お前たちのお母さんって…」

俺がそこまで言って気づいたのだろう。

「お母さん!」

そう、月野と星野の母、夢野さんは…

人間。

「月野！夢野さんの居場所は？」

「国家第一病院S棟。」

月野は淡々と答えた。

国家第一病院、国が管理している病院。

S棟、一般人は絶対に入れない国の研究施設としても知られている。

ああ、そうか。

月野は夢野さん<sup>おかあ</sup>を逃がせないと悟ってしまったのだろう。

月野は力が抜けたように一点を見つめて動かない。

正直、違う名前の病院の名前が出てきたらまだなんとかかっていたかもしれない。

だが、国一のSになると話は別だ。

国に全てが管理されている。

もう、国から逃げることはできない。

「月野！星野を探すぞ！」

月野が焦点の合わない目で俺をみる。

「お前たちは母親の安全の代わりに仕事をしていたんだろ！いくら国でもお前たち二人と張り合える力はない！今なら間に合うかもしれないだろ！」

「間に合わないよ…もう間に合わないんだよ！私は結局ママも…誰も助けられないんだよ！」

「月野！！！！！」

暴れる月野の手を握って俺は彼女の名前を叫ぶ。

「お前は魔術が使えるんだ。きっとできる。」

「でも！私は魔術を使いたくない！使わない！人を傷つけない！」

「お前の魔術は人を傷つけない！人を助けるんだ！」

「助けるの…？」

「ああ、お前にはその力がある。魔術がある！」

「傷つけない？」

「助けるんだ！夢野さんを…人間を…。」

月野は涙がたまった目を袖で拭き、いつものように口角をあげて笑った。

「助けるわ！」

それから、連絡のついた星野と水脈が屋敷に来た。

俺の両親はさすがに五十嵐の人間だということで捕まってはいるらしい。

樹理華は以前連絡がつかない。

いや、連絡はしない方がいい気がする、していない。

それよりも、考えなくてはならないこと。

悪魔は本当に人間の指示で動いているのか。

町からどれほど人間が消えたか。

つかまった人たちがどこにいるのか。

この3点だ。

時間はそんなに無い。

だが無闇に動けない。

この屋敷なら、ニユースをみて来てくれた風音さんが守ってくれている。

さすがに聖天使だった人に魔力で敵う天使はそうそういない。

だから、できる限りのことはここでやっていきたい。

すべてを整えなくては。

勝たなくては…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5240v/>

---

俺は魔術が使えない 私は魔術を使わない 不可能と拒否の言霊

2011年12月9日00時47分発行